

第4回日本放射線看護学会学術集会に対する随想

An essay on the 4th Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan

有村 健

Takeshi ARIMURA

第4回日本放射線看護学会学術集会 事務局長
メディポリス国際陽子線治療センター

Medipolis Proton Therapy and Research Center

九州最果ての地、指宿で行われた第4回日本放射線看護学会学術集会は如何だったでしょうか？ 皆様には大変なご不便やご面倒をおかけしましたが、今となってはそれなりの思い出になったのではないのでしょうか。私たちも貴重な経験をさせていただき、皆様に感謝申し上げるとともに、事務局長の立場から、あるいは医師の立場から本大会を振り返ってみたいと思います。

ひょんなことから指宿で学術集会が開催されることになり、さらに、どういう巡り合わせか自分が事務局長を拝命することになりました。看護学会に馴染みはありませんでしたが、大会運営に関しては主催者にある程度自由な裁量が与えられると伺い、引き受けました。全国規模の学術集会は、一般には大学などの研究教育機関が主催し、重厚で格式高い雰囲気好まれるように思いますが、大学外での開催だからこそ、その特徴を活かし、記憶に残るような楽しい学術大会にできればよいのではないかと考えるようになりました。

このような事情により、1年前に大阪で開催された第3回大会に参加させていただく機会を得ましたが、そこで一つ感じたことがありました。それは大学などでのいわゆる「研究」と、医療の現場「臨床」の乖離でした。それらは車の両輪のごとく調和し、現在の医療を形づくったことは皆さんご存じのとおりです。それまでの私の理解では、看護師の主な担当領域は「研究」<「臨床」であり、その割には臨床を題材にした発表が出ていなかったのがとても不思議でした。たとえ大層なものでなくとも、現場でさまざまな工夫をされているはずで、どうしてそれが素直に出てこないのか。それこそが看護師の多くが一番知りたいものではないだろうか。この違和感を埋め合わせることに焦点を絞れば、大学主導ではなかなか難しい新たなフィールドを提供できるように思いました。

一般の病院では、看護師のローテーションが頻回に行われ、一つの領域を極めることがなかなかできない環境にあると思います。確かにジェネラリストに対する社会的需要は大きいのですが、それでは本物のプロフェッショナルが育たないのもまた事実です。看護師は医師の最良のパートナーであることは疑いようありませんが、その領域だけを勉強してきた医師と対峙できるほど知識や経験を積んでいないことが多く、大抵は（失礼ながら）議論になりません。ただそのような環境でも、いつも患者に寄り添う看護師だからこそできることは大いにあるはずです。

当施設は単科で組織内ローテーションがないという極めて特殊な環境にありますが、看護師自身が多くの臨床データを有し、独自に解析し、学会発表し、自ら築いたエビデンスをベースに診療の指針を形成していくため（当然、他職種も関わりますが）、組織としての成長が期待できます。たとえ結婚や出産で一時的に現場を

離れようとも、組織にはエビデンスの構築手段と明確な指針があるので、組織としての歩みが止まることはありません。人がどれだけ入れ替わろうとも、研究を個人プレーで終わらせない一貫した取り組み、そこにこそ研究と臨床の乖離を埋め合わせるヒントが隠されているように思います。そのため、私たちのささやかな研究についても、恥ずかしげもなく前面に出すことにしました。

大会のメインテーマは「医療安全」でした。幹部でもなければ、ほとんど触れたことがない内容で、正直多くの方が面食らったと思います（予想どおりのアンケート結果でした）。でも、よく考えてみてください。病院の中で、患者の安全に一番携わっているのは看護師ではないでしょうか？ 医師の医療安全への意識は総じて低くないと信じていますが、自己流や思い込みで凝り固まり、時間に追われる中で、医療安全への意識がますます低下していく危なっかしい人も多くみられるのではないかと思います。そのような環境下で、患者や自分自身を組織的に守れるのは看護師だけであり、その活躍を期待しているのは決して私だけではないと思います。

幸い、私たちは JCI (Joint Commission International) 認証のためのさまざまな取り組みを経験しており、医療安全に対する意識は高いほうだと自負しています。学術大会で「医療安全」を取り上げ、議論の足跡を残すことに意義があるのではないかと考えました。そこで、JCI 査察と学術集会を同時期に設定し、彼らの医療安全に対する取り組みや考え方に直接触れる機会を提供し、かつ医療安全の向上に積極的に取り組まれている日本の第一人者と対談していただき、さらにそれを実習する形で翌日の見学会を提供する、そのようなプランをお届けしました。

本大会では、壮大な研究よりも身近な臨床に力点を置いたプログラム構成に徹しました。結果として、我田引水的思考に過ぎた面もあり、また学術的視点では、いささか偏りが生じた可能性も否定できず、その批判については甘んじて受けたいと思います。歴史が浅く、若い学会であるからこそ、これから歴史を作っていく必要はありますが、今後の方向性を考えるうえでの、一つのスパイスにはなったのではないのでしょうか。

大会の準備や運営は全職員が一丸となって行いました。というより、そうしなければできませんでした。看護師はあくまでも看護の専門家であり、資金集めやその管理は決して簡単ではないはずですが、これまでの大会は、おそらく各施設で孤軍奮闘された結果として、何とか成功に導くことができたのだろうと推察しますが、学会員の増加と大会規模の拡大が続く中で、現システムのままでは、いずれ限界がやってくると思います。先に述べたように、これも個人プレーで終わらせるのではなく、組織の成長とともにあるべきであり、学会準備や運営に関するデータなどを学会が主体的にプールし、その解析を基に、新たに大会を主催する施設を全面的にサポートしていくシステム作りが重要ではないかと思います。

最後に、幾多の困難を経てはるばる指宿まで辿り着き、へとへとになりながらも笑顔で地元に戻られた大会参加者、また大会運営にご尽力いただいたすべての方々に対し、心より御礼申し上げます。本学会の今後ますますのご活躍を祈念して、このつたない随想を終えたいと思います。本当に有り難うございました。